

実施年度	: 2024 (2025 入試) 年度
試験日	: 2024 年 9 月 7 日
入試種別	: 大学院 (修士課程) 入学試験問題
学部・研究科	: 文学研究科 仏教学専攻
科目名	: 専門科目

### 【解答又は解答例】

問1 仏教教義3題の中、一題を選択して解説する。

- ① 「中道」については、苦と楽、空と有といったような極端に偏らない非苦非楽、非有非空という中正の立場であること、およびこの立場は縁起の自覚によって体得できること、さらに実践的には物事に執著しないことなどが記述できているかどうかの評価基準となる。
- ② 「三学」については、戒学・定学・慧学の三項目より成り立ち、卓越した三つの修行道であることと、三学それぞれの解釈が適切に示されているかどうか、さらにこの三者は互いに関連しており、これらが相まって悟りを求めるところを形成していることなどが記述できているかが評価のポイントとなる。
- ③ 「只管打坐」については、道元の思想的特色であり、その意義とともに禅の中でも黙照禅と呼ばれる曹洞宗の禅の特徴となっていることが記述されているかが評価のポイントとなる。

問2 仏教史上の人物3名の中から、一人を選んで解説する。

- ① 「龍樹」については、大乘仏教の大成者であり、特に空を説く中観派の祖であること、および八宗の祖師と称せられるほど幅広い活躍をして、『中論』を初めとする多くの書を著したことや、後の仏教はすべてと言って良いほど龍樹の影響下にあることなどを記述しているかが評価基準となる。
- ② 「玄奘」については、インドへ赴き多くの経論等を中国にもたらした人物で、帰国後、『大般若経』など膨大な経典等を漢訳し、中国における漢訳の歴史を塗り替えるほどであったことや、特に唯識の教義に精通し法相宗の鼻祖と称されること、および『大唐西域記』を著したことなどが記述されているかが評価ポイントである。
- ④ 「源信」については、恵心僧都または横川の僧都とも呼ばれた平安時代中期の天台宗の僧侶であり、『往生要集』を著し、地獄・極楽の思想を世に広めたこと、また念仏として観想念仏が主であるが称名念仏も進めており、後の鎌倉時代

の浄土教成立に強い影響を与えたことなどが記されているかが評価基準となる。

問3 仏教の典籍3点の中から、一題を選択して解説する。

- ①『維摩経』については、在家の長者である維摩居士が仏弟子達を凌駕するほどの能力を有しており、空やまた文殊との対話で明らかになった言葉や文字で説くことができない不二法門について論じられている大乘經典であることが記されているかが評価のポイントとなる。
- ②『俱舍論』については、説一切有部の教学を基準としながらも経量部等の教説も取り入れて、仏教の存在論や実践論について体系的にまとめた仏教の基本的綱要書であること、また後に日本においてはこの論に基づいて俱舍宗が成立したことなどが記されているかが評価基準となる。
- ③『即身成仏義』については、平安時代初頭の空海の手書であり、真言宗（真言密教）の根本教義である「この身このままで速やかに仏となる」即身成仏について論じたものであること、特に冒頭に出る「即身成仏偈」に示される六大・四曼（四種曼荼羅）・三密について解説されているか、評価基準となる。

問4 『勝鬘経』巻5の「一乗章」のまとめの部分からの出題である。

（仏・法・僧の三宝の中）、法とは一乗道であり、僧とは声聞・縁覚・菩薩の三乗衆であるが、この二者は究極的な帰依とはならない。なぜならば、一乗においては究極的な法身を説くが、三乗衆は（根本煩惱）を断じていないから恐怖を有するのであり、如来に帰依することによって無上菩提を修学していくのであるから、この二つは究極的な帰依ではないということになる。仮に如来に煩惱を調伏された衆生があつて、如来に帰依して信樂の心を得て法と僧に帰依したとしたら、この二つの帰依は別個の帰依ではなく如来への帰依に他ならないことになる。（なぜならば）帰依の第一義は如来へ帰依することであつて、他に如来はいないから、法と僧の二帰依は如来への帰依に帰一するのである。如来への帰依とは仏法僧の三帰依である。なぜならば、如来は一乗道を説くからである。四無畏（正等覚無畏・漏永尽無畏・説障法無礙・説出道無畏）を成就した如来は獅子吼によって（一乗道）を説かれたのである。如来はその時処に応じて方便を説き、それらの教えは（どのようなものでも救う）大乘であつて、そこに三乗の区別はない。三乗は一乗に摂せられ、一乗こそが第一義となるのである。

◇ 如来への帰依（三帰依）および一乗眞実・三乗方便ということがしっかりと記述されているかが、評価の基準となる。